

『愛と死』と『ある婦人の肖像』を較べて
愛する者の死がもたらす両極性

飯島 昭典

はじめに

「失う」の意味を広辞苑で調べると第一義には「なくす」とある。これは当然の事であり、いまさら説明の必要はないだろう。そして他の意味をここで挙げるならば、「今までの正常さがなくなる」、「縁を切る」などがある。愛する者との死別を扱った作品は古今東西の区別なく、枚挙に暇がないが、愛する者を「なくす」事は残った人にとって「今までの正常さがなくなる」ほどの悲痛であり、「縁を切る」この状態は人間において最も劇的な出来事である、と言えるであろう。それゆえ多くの小説家、詩人、劇作家がこの愛する者との死別という悲劇を、美しい芸術作品として作り上げてきたのである。

本稿で取り上げる作品は武者小路実篤(1885-1976)の『愛と死』(1939)¹とヘンリー・ジェームズ(Henry James, 1843-1916)の『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*, 1881)²であり、この二つの作品の比較研究を行う。『愛と死』の主人公、村岡という小説家は友人の妹、夏子の活発さと美しい容貌に惹かれ、やがて互いに愛し合うようになる。『ある婦人の肖像』の主人公イザベル(Isabel)³も選んだ夫オズモンド(Osmond)の本性を知り、そして病身の従兄ラルフ(Ralph)が幽明境を異にするにあたって、彼の無尽の愛を意識するのである。村岡もイザベルも愛する者を得て、そして不幸にもそれらを失ってしまう、という点では共通である。この点では『愛と死』、『ある婦人の肖像』どちらの作品も、至純で崇高な愛の感情の尊さを扱っている、と言えるであろう。しかし、ここで私が述べようとするのは、両作品の違いについてである。

『ある婦人の肖像』における結末のイザベルの行動について説明した批評をここで紹介する事にする。舟阪 洋子は「イザベルが現実には、幸せな結婚生活の回復は望むべくもない Osmond との生活に戻ってゆく以上、彼女はやはり

別の孤立を選んだことになる。唯、その孤立はイザベル自身が望んだ孤立ではなく、どうしようもない閉ざされた人間の状況から生まれてくる孤立である」とし、連帯とは反対の孤立を強調している。それに対してクリスティン・サナー(Kristin Sanner)は同じ結末のイザベルについて説明する「彼女は自由の身だった」(" she was free ") (622)という描写に触れながら、以下のように述べる。「つまりイザベルの自由の意識は、母と娘のいかなる関係性の中に交互に入っていく、自分自身をそれに近づけようとせき立てているように思えるのだ。イザベル自身が母の役割であれ、娘の役割であれ、である」(" In short, Isabel's sense of freedom seems alternately to get in the way of any mother/daughter relationship (whether Isabel is the mother or the daughter) and to push her closer to it ")、というように孤立とは反対の親娘の連帯という評を行っている。孤立と連帯は正反対の概念である、と言えるがこれらの批評家の見逃している点は、死者ラルフとの関連性ではないだろうか。

両作品の違いを述べる事が本稿の目的である事はすでに説明したが、このペーパーの論題は、共に愛する者が死ぬという作品において、その死んだ者たちの死がそれぞれの作品の主人公に及ぼす効果の違いは何であるか、という事である。イザベルを説明した先の二人の批評家のキーワードは孤立と連帯であった。ここで重視するのもその二つのキーワードである。『愛と死』という日本文学に対して、アメリカ文学について行った批評のキーワードが重なってくるのが、このペーパーで明らかにされるのである。もちろん、『ある婦人の肖像』に対して行った批評を『愛と死』にあてはめるのは間違いであり、引用する批評の改ざんという問題にまで発展する事であろう。ここで言う「重なってくる」というのは、批評をそのままあてはめる事ではなく、引用した批評の概念が別作品に通じるものがある、という意味である。ここで両作品の比較研究を行う

事は、両作品のさらなる理解を手助けする事になるであろう。

1. 『愛と死』の愛の構造

『愛と死』は村岡と夏子の幸福な恋愛とその終焉を描いた作品であり、当然の事ながら作品の主軸となるのは二人の感情の行き交いである。村岡が夏子を初めて目にするのは、先輩の小説家野々村の家に行った時、他の4, 5人の女子学生と共に彼女が逆立ち競争をしていた時だった。村岡自身も「元気な女もいるものだ」(7)とやっているように、彼女の第一印象は活発さという形容詞で表現する事が出来る。その後偶然により何度か彼女を目撃する事になるのだが、恋愛感情の芽生えとは至らないのである。「尊敬する友達の妹をそういう目で見たいと思わなかった」(8)という村岡の考えは、彼女に対しての無関心を説明する言葉として適切であろう。

しかし、友人野々村の33歳の誕生日において、この村岡の無関心は劇的な変化を経験する事になるのである。集まった人々も酒が入り、順番に余興を始めるといふ展開になったのである。村岡は皆が余興をした後で自分だけが出来ない、真っ赤な顔になり閉口してしまうという窮地に陥る。

殊に前から僕に厚意をもっていない四五人の仲間は、僕が弱れば弱るだけなお責めよせてくる。

「皆の前をはって歩くだけでもいいじゃないか。出来ないというわけはない」

「許してやれよ」と野々村が言った。

「だめです。だめです。そういう先例が出来るとあとのためによくありません」

僕はますます閉口した。額から汗が出てきた。

「早くやれよ」 (11)

この場面での村岡は、野々村の助けも借りる事が出来ない、孤立した状態と
言っていいたろう。⁴野々村自身も自分の誕生会でもあり、強く中止を求めて場
を白けさせるわけにはいかず、はやし立てる4, 5人以外の他の仲間にとって
も場の雰囲気を考えるならば、中止の申し出は言い出しにくい場面である、と
言える。大きな勇気がいるのである。

この窮地を救ったのが夏子である。彼女が初めて登場したときの活発さは、
村岡の代わりに宙返りの余興をやる、という勇気の布石となっていたのである。
村岡の閉口と夏子の勇気は、この場面で対照的な要素である。彼女の示した勇
気により村岡は救われ、「僕はそれ以来、野々村の妹のことが忘れられなくな
った」(12)のである。夏子の示した勇気は、村岡と夏子の愛の発生の元となっ
ている、と言う事が出来る。夏子の勇気と村岡の閉口という動と静、あるいは
宙返りの余興とたたずむ村岡という動と静は、作品タイトルの『愛と死』とい
う対照をなす二つの概念とも重なる事である。つまり生きた状態の愛である動
と、死である静は対照をなすのである。その意味でこの場面の夏子と村岡の表
す動と静のエピソードは、作品の中で重要な意味を持っていると言えるのであ
る。夏子の救いという愛の発生の契機により、二人は急接近することになる。
これ以降村岡と夏子が互いに愛を享受する描写は続く事になるのだが、ここで
は第15章の村岡による夏子に対しての説明を引用するにとどめる。「夏子は
今や僕には欠くことのできない存在になった」(42)のであり、「僕の居る処に
は夏子が居、夏子の居る処には僕が居た」(42)という状態である。葉書一つ出
せば互いに会おう二人は、空間的な距離のみならず、精神的な距離においても
密接なものである。相手の不在を望まないこの状態は愛の喜びを享受している

状態であり、村岡の言葉を借りるならば、「幸福の絶頂にいた」(42)と言えるものであろう。村岡と夏子がそばにいるという空間的に密着している状態での愛の享受と、村岡のパリへの洋行中での夏子の死という、互いに離れた空間の違いでの不幸は、この作品におけるもう一つの対照であると言えるのではないだろうか。

「愛の感化」という言葉があるが、村岡にとって夏子との恋愛は幸せである、という事の他に何かもたらさないだろうか。自分は「女に好かれない自信があったから、別に気にもしなかったし、夏子に近づこうとも思わなかった」(15)頃の村岡の人生観をここで引用して見たいと思う。

夏子が感心しないではいられないものを書こうという内心の野心は持っていたが、それはただ一種の征服慾にすぎなかった。若い時の自分は征服慾が何よりも強かったと言いたい位で、何か不平があったり、不快があったりすると、自分の仕事でそれを征服したいと思った。いい仕事をする事、それだけが自分に許されている事だと思った……

見るもの聞くもの癩の種であり、征服される為の存在のように思えた。自分より偉い人間がこの世に居ることに嫉妬を感じた……(15)

夏子に対しては征服するための存在としか考える事が出来ず、自分より上位のものには嫉妬を感じる、という強烈な自己中心的思考を垣間見る事が出来る。ここには相手の存在を認める思考は見受けられず、あくまで自分にとって相手が下位に位置していなければならない、という優越思考があるのである。ジェンダーの研究者である伊藤 公雄は、男性的思考を説明する言葉に、権力思考、所有思考、優越思考の3点を挙げているが、上の村岡の考えはこの男性的思考の望ましくない形として表れている、と言えるであろう。

こうした村岡が夏子との結婚をひかえた状態ではどんな変化を経験するのだろうか。日本に帰る船の中で村岡は夏子にこのような手紙を書く。

帰ればもう、お前とは一日もはなれないですむ。たのしい生活が始まる。しかし僕達は享乐的になって罰を受けるのを恐れる。人生はもっと真面目な、義務を果たす、勤勉な生活をしなければならない所として二人で協力したいと思う……最も楽しい空想が出来る自分達は仕合わせだ。見知らぬ神に感謝して、喜びの日を謹んで待ちたい。

十一月十二日、その日を待ちのぞんでいる二人に祝福あれ。…… (77-8)

もはやここでは夏子は征服される存在ではなく「協力して生活」する精神的パートナーとなっているのである。人生に対しても「義務を果たす」という言葉などにも見られるように自分の位置を理解しているのである。すべての上位者に嫉妬していた以前の村岡とは、大きな違いがあるのがわかる。夏子との愛を享受している村岡が神に対して自然と感謝する姿勢は、以前の村岡に比べて謙虚さという点で、次元が高くなった状態である事は言うまでもない。自己中心的思考から夏子という他者への理解を経験するだけでなく、「見るもの聞くもの全て癩の種」(15)であった心の状態は、神の恩寵に感謝するという状態に変化したのである。

村岡に変化をもたらす愛は、村岡を望ましくない状態から望ましい状態へと救うものであり、村岡にとっては救われるという受身の意味を持つものである。愛の発生の契機も、酒の席での困窮から夏子に救われる、という受身の意味を持つものであった。作品中で恋する乙女としての夏子の描写は繰り返し行われるが、夏子が愛を知る前は精神的に未熟であった、という説明はされていない。精神的に未熟であったのは村岡であり、その状態から夏子との恋愛によって彼

は救われるのである。酒の席での宙返りの余興による救いがそのまま村岡の精神面での成長、つまり救われた状態にぴったりあてはまるのである。夏子に対して「僕は本当にお前が神聖に見えるのだ。いくらお前はあたりまえの女だということを知っていても、神は僕になんという恵深い送り物を送って下さったのだろう」(70)と村岡は説明しているが、こうした説明についても夏子を神性を帯びた存在として考え、自分を助けるものという隠れた意味を読み解く事ができないだろうか。神からの「恵深い送り物」というのは、つまり与えられるものであり、自らの手によって勝ち取ったものではないのである。救うものとしての神性を帯びた夏子についての印象や神からの送り物としての夏子は、村岡に愛を与えるものであり、村岡にとっては与えられるという受身の意味なのである。村岡は夏子を恋人として意識する前は、征服されるべきものとして夏子をみなしており、この意味で村岡は夏子に対して能動的な意味を持っていた、と言えるであろう。しかし、恋愛の成就が達成すると、村岡に対して夏子を与えるという能動性を持つようになり、立場が逆転する。村岡は受身の立場になるのである。『愛と死』中の村岡と夏子の愛の構造についてここまで述べてきたが、村岡にとって夏子の愛は、自分が救われる、与えられるという受身の意味を持っていると言っていいだろう。

2. ラルフのイザベルへの働き

ヘンリー・ジェームズはアメリカ対ヨーロッパという構図で語られる事が多いが、彼の代表的作品である『ある婦人の肖像』もやはりアメリカとヨーロッパの対比をテーマにしている。オルバニーから伯母に呼び寄せられたアメリカ人イザベルは、午後のお茶会という極めてイギリス的な場面で登場する事になる。ガーデンコートというそのお茶会の場は、「輝かしい夏の午後を過ぎた申

し分のない頃」(" the perfect middle of a splendid summer afternoon ")(3)という時間帯であり、「楽しみの主な源」(" the chief source of one's enjoyment ")(3)という期待感を持たせる情景である。この情景がアメリカからやってきたイザベルの「彼女はこの世界を明るい場所であり、自由に広げられるものであり、抑え切れない行動の場所であると固く信じていた」(" she had a fixed determination to regard the world as a place of brightness, of free expansion, of irresistible action ")(52)という性格と重ね合わせられるのは注意すべき事柄であろう。明るさや期待感という共通項を持っているのである。(" Gardencourt ")というその庭の名前も「エデンの園」(" The Garden of Eden ")を連想させるものであり、これから被る事になる不幸をまだ知らないイザベルの無垢や幸福感を感じさせるのには十分な設定である。

実際にイザベルの当初の人生観というのは積極性と意思の力を強く信じている、と書いていいだろう。「彼女は人生について大変な好奇心を持ち、いつも目を見開いて不思議さ感じていた。自分の中に人生の大きな源泉を持ち、自分の魂の動きと世界の動きの間に連続性を感じるのが彼女の最も深い喜びであった」(" she had an immense curiosity about life, and was constantly staring and wondering. She carried within herself a great fund of life, and her deepest enjoyment was feel the continuity between the movement of her own heart and the agitation of the world ")(35)という説明は、イザベルの性格を示す言葉としてうってつけのものではないだろうか。

このようなイザベルに対して金銭面と精神面で援助するのは従兄のラルフである。ラルフの父ダニエル(Daniel)の遺産の多くを、彼の厚意によってイザベルが相続するように取り計らうのである。ラルフは確かに「私はイザベルを

愛してはいません」(“ I am not in love with Isabel ”)(191)とはっきり述べているが、父との会話の中のこの発言は彼の取る行動と自分の行動についての彼自身の説明を聞かならば、全く逆の意味である、という事がわかる。「自分は長くは生きられません。しかし彼女がどうなるかがわかるまでは生きたいと思います」(“ I shall not live many years; but I hope I shall live long enough to see what she does with herself ”)(191)という彼の言葉はイザベルに対しての大きな関心であり、「彼女の帆に少し風を送ってやりたいのです」(“ I shall like to put a little wind in her sails ”)⁵(191)という金銭の援助は彼女への恋心があればこそのものである。長くは生きられないながらも、イザベル自身の意志を信じる力に共鳴して、風という見えない力になる事を願うラルフは、見返りを求めない深い愛情があればこそ出来る援助を行ったのである。病気の身であるラルフははっきりイザベルを愛していると言う事は出来ない。しかし、彼は表面から隠れた深い愛情をイザベルに抱いており、彼女の人生に対して自分が影響力を行使できる事はまずありえない(191)という発言とは逆の、自身による援助という強い影響力の行使の願望を見て取る事が出来るのである。

イザベルはラルフの大きな愛を感じるようになるわけだが、イザベルとラルフは共に共通項を持つ性格である、という事を述べなければならない。病気が重くなる前、「ラルフは実際足が大変長くもあり、立っていて歩き回りながら仕事をする事を好んだ」(“ Ralph, indeed, who had very long legs, was fond of standing, and even of walking about, at his work ”)(40)という彼は、魅力的で快活なイザベルの積極性と行動力という点で一致を見るものである。そして彼の内面性を説明した次の一節は、イザベルとの類似点を説明する上で重要である。

His outward conformity to the manners that surrounded him was none the less the mask of a mind that greatly enjoyed its independence, on which nothing long imposed itself, and which, naturally inclined to jocosity and irony, indulged in a boundless liberty of appreciation. . . .

彼が自分を取り巻く慣習へ外面的に合わせる事は、独立心を大いに享受する心の隠れ蓑に他ならなかった。何かに長く留まる事はせずに、生まれつきの陽気さと皮肉さを好む性格から、物事を限らない自由さを持って鑑賞する事が常だった。……

イザベルの慣習にとらわれない、意志の力を信じる性格や自由への希求と近い性格を持つラルフが明らかなのではないだろうか。対人心理学で恋の発生要素の一つに類似説というものがあるが、イザベルとラルフは似た共通項を持つという意味で、恋愛の発生の理由としては十分なのである。

イザベルが夫として選ぶ事になるオズモンドとマダム・マール (Madame Merle) は愛人同士である。彼らの秘密の取り決めによりイザベルは、実際にはマダム・マールの生んだ子であるパンジー (Pansy) を夫オズモンドの連れ子として育てる事になる。イザベルの相続した遺産、そして家柄を利用すべく自分たちの用意した罠にイザベルを落とし入れたオズモンドとマダム・マールなのである。⁶ ローレル・ボリンガー (Laurel Bollinger) は「イザベルの描写以上に恐らくずっと印象的なのは、彼女が悪を理解できない事である」 ("Perhaps even more telling than the description of Isabel is her inability to understand evil ") と述べているが、ラルフはイザベルにオズモンドという罠について警告している場面がある。オズモンドを「彼は趣味の権化だ」 ("

He is the incarnation of taste ") (363)と表現したラルフであるが、
続くラルフとイザベルの会話をここで引用してみたいと思う。

‘ He judges and measures, approves and condemns, altogether
by that. ’

‘ It is a happy thing then that his taste should be
exquisite. ’

‘ It is exquisite, indeed, since it has led him to select
you as his wife. But have you ever seen an exquisite taste
ruffled? ’

‘ I hope it may never be my future to fail to gratify my
husband’s. ’ . . .

‘ Ah, that’s willful, that’s unworthy of you! . . .

‘ You were not meant to be measured in that way you were
meant for something better than to keep guard over the
sensibilities of a sterile dilettante! ’ . . . (363-4)

「彼は自分の趣味だけで判断し、測り、賛成し、反対するんだ」

「そうだとすれば彼の趣味が素晴らしいというのは幸せなことです」

「君を花嫁に選んだのだから実際素晴らしい趣味に違いない。でもこうい
う趣味が苛立つのを見た事があるのか」

「夫の趣味を満足させられない自分には将来なりたくないわ」.....

「ああ、それは意地っ張りで君にふさわしくない。.....そんな風に君は判
断されるべきではないんだ。君は不毛な好事家のご機嫌をうかがう事より
も、もっと良い事をするはずの人だ」.....

ラルフとイザベルのこの会話を特徴づけるのは互いの率直さではないだろうか。オズモンドの危険を予知してのラルフの言葉は真剣で熱を帯びている。イザベルの返す言葉も直情的である。実はこのような二人の率直さが二人を結びつけるものであり、腹を割った本心の話ができる関係である、という事を意味しているのである。後のオズモンドとの夫婦生活において「彼はどんどん落ちていく。そのような転落を見ていると目まいがしそうだった。これが唯一の苦痛であった。彼はあまりにも奇妙で違っていたので、自分の心に触れる事はなかった」(" He was going down down; the vision of such a fall made her almost giddy; that was the only pain. He was too strange, too different; he didn't touch her. ") (507)と述べるイザベルの夫に対しての冷たい感情とは明らかな対比をなしているのである。オズモンドはラルフと違いイザベルの情に訴える事は何もないのである。ただ墮落していくという悲惨さを見る苦痛だけである。ラルフとの感情と感情をぶつけ合う関係とは歴然とした違いがあるのがわかるであろう。心に触れる事がない、という無関心はある意味、憎しみよりも愛情から遠い状態と言えるのである。

オズモンドと結婚してラルフから離れれば離れるほど、そしてラルフの病気が悪化すればするほど、逆にイザベルはラルフへの愛情を強めるわけだが、その愛の極点となるのは、皮肉にもラルフの臨終の場面である。「ここで私がひざまずき、あなたが私の腕の中で死んでいく。こういう事で私は長い間味わったことのない幸福感を味わっているわ」(" Here on my knees, with you dying in my arms, I am happier than I have been for a long time ") (608)と述べる一方、「悲しい事は何も考えないで。私が側にいてあなたを愛しているという事だけを考えてください」(" not to think of anything sad; only to feel that I am near you and I love you ") (608)

と愛を告げるイザベルである。ラルフは「生には愛がある」("in life there is love")(606)と言う時があるが、その生が失われる時にイザベルとの愛は最高到達点に達する事になるのである。

ラルフを失ったイザベルは愛を失うのだろうか。それはイザベルがオズモンドの元に帰るといふその行為によって、逆説的だが愛を受け継いでいると断言していいだろう。イザベルはパンジーというマダム・マールの隠し子を自分の娘としているのである。オズモンドによって修道院に閉じ込められているパンジーを救うために、愛のない夫の元に帰るのである。パンジーに修道院において必ず戻ってくる、と約束したイザベルは約束を果たすつもりでいるのである。いわば救う人間としての意識による帰宅である。他人の子への救いという打算のない愛情はラルフの見返りを求めない愛情と近いものである、と断言していいだろうか。グッドウッド(Goodwood)のオズモンドの元には帰るなという忠告にも耳を貸さないイザベルは、暗闇の道の中を歩いていく。「どこに向かっていけばいいかわからなかった。しかし、今はわかった。まっすぐな道があった」("She had not known where to turn; but she knew now. There was a very straight path")(622)という説明は、イザベルのぶれない決意を表す比喩である。彼女はラルフの真実の愛に触れて、自らもラルフと同じ見返りのない救い主としての意識をはっきりと持つのである。イザベル自身がラルフと同じ救う人間としての立場を取る事で、ラルフと同じ働きをするようになる。この意味でラルフのイザベルに傾けた愛情は、彼女に受け継がれている、と言えるのである。コルム・トイビン(Colm Toibin)の「ジェームズの小説の言葉遣いは覆面でもあり、明らかな暴露でもあった」("James's language in the fiction was both mask and pure revelation")という言葉は、このまっすぐな道の説明と彼女の決意という心象が、物理的状况によって表されているという意味で、的確な説明であると言える。

まとめ

『愛と死』における愛の構造は、主人公村岡が夏子によって救われる、という受身の構造を持っているという事を本稿の第1節で明らかにした。そして本稿第2節ではラルフによるイザベルの働きとして、死んだラルフの救うものとしての役割をイザベルが継承する、という意味でラルフの愛は死んでもイザベルに生かされている、という事を説明した。

この両作品に共通するものは、愛する者の死であり、その者たちの死が主人公たちに及ぼす効果の違いを明らかにする事が本稿の論題であった。生井知子は武者小路実篤の死生観について「個人的な命がつきてもそれは個々の意識が滅びたに過ぎず、より大きな存在として一体化することによって半永久的に生き続ける」(226)として死せる者の存在の意義を述べている。彼女のこの説明は、『愛と死』の最終章における「死んだものは生きている者にも大なる力を持ち得るもの」(115)という実篤の言葉にも重ね合わせられるものである。重要なのは、主人公村岡が夏子の死を21年前の事として覚えてはいるが、その死によって彼が何らかの自身の向上を経験する事はない、という事である。いわば夏子の死による愛の喪失は、彼に対してマイナスの消極性のみを与えているのである。「人間というものは無常なものであり、憐れなものである」(115)という村岡の言葉は夏子を思う言葉でもあり、残された自分に対する言葉でもあるのである。愛する者が存在したときに経験した感化という向上性と、愛する者が死んだ後の喪失感には明らかな対比があるのである。この意味で作品タイトルの『愛と死』は完全に分断を意味するものである。

それに対して『ある婦人の肖像』のラルフのイザベルに継承された救う者としての役割は、消極性とは反対の積極性を持っていると言えないだろうか。パ

ンジーへの救い主となる意思は間違いなく積極性なのである。ラルフからの役割の継承は、死者との連帯であり、分断ではない。そして救う役割というのは、マイナスベクトルの意思ではなく、自身を向上させる意思なのである。『愛と死』の村岡の感じている夏子喪失による絶望感、自身を向上させる事のない状態とは明らかな違いがある。本稿の論題、両作品の死者の生きているものへの影響の違い、それは『愛と死』において死者は主人公に消極性と愛している状態との分断を与えるものであり、『ある婦人の肖像』における死者は、救う者としての積極性と死んだ者の性質の継承させる意味で、死者との連帯を与える、という事である。これがこの論文の出した答えである。

武者小路実篤における母の影響、母性についての議論、そして母親の影響によるロシア文学からの吸収等は今後のテーマである。またヘンリー・ジェイムズの女性観や女性の描き方等は繰り返し研究されているテーマである。両者を女性という観点で結びつけ、何らかの共通する点、違っている点を見つける比較研究を行うのも興味深い事ではないだろうか。これに関しては別稿を用意するつもりである。

註

- 1 . 以下、同書からの引用は、入手のしやすさの観点から、武者小路実篤『愛と死』、新潮文庫、第2版に拠るものとする。
- 2 . 以下『ある婦人の肖像』からの引用は、Henry James, *The portrait of a lady*, Ed. Philip Horne, Penguin Books, 2011の版によるものとする。
- 3 . イザベルの姓は Archer であり、「弓の射手」という意味である。この単語からの推論として何かを目指す、狙うという事とイザベルの自由への希求、成長への願望という目標達成を目指す性質と重ねられる。この小説を一種の教養小説と考えても、作品終盤のイザベル自身のあるべき姿への開眼は、イザベルによるそれを目指した行動の結果とも考えられる。「弓の射手」という何かを目指す行動と的という目標達成、開眼はイザベルを表す言葉として適切である。
- 4 . この村岡の状態は考え方によっては、彼の精神的未熟さを表すものとも考えられる。座の雰囲気を考えるならば、彼自身の出来る何か余興をするべきである、という指摘は成り立つと考えられる。悪乗りによるはやし立てとは必ずしもこの場面の描写からは、言う事は出来ない。
- 5 . イザベルの船のイメージはキリスト教のシンボルでは教会と同じ意味である。創世記7章8章のノアの箱舟は、救われるべき生き物を乗せた。これが教会の形象としての舟のモデルである。教会はこの世の嵐を乗り越え、誘惑という暗礁を避けて、信者を無事に救い港へと運ぶ船である。イザベルがパンジーを救う役割にも当てはまるし、その決意に至るまでの様々な求婚者の誘いは、ある意味誘惑である。
- 6 . マダム・マールが登場する場面で、部屋の中の影が深まり、外が暗くなっ

て、雨が降り出して風が大木を揺さぶるという描写は(181)、不吉さの暗示としては十分なのではないだろうか。この天候は明らかに作品序盤のガーデンコートのもるい期待感を持たせる雰囲気とは真逆である、と言える。

引用・参考文献

- Bollinger, Laurel. "Poor Isabel, who had never been able to understand Unitarianism!: Denominational Identity and Moral Character in Henry James's *The Portrait of a Lady*" *The Henry James Review* 32.2 (Summer 2011): 160-177. Pro-Quest. Web. 6 Jan. 2015.
- Sanner, Kristin. "Wasn't all history full of the destruction of precious things?: Missing Mothers, Feminized Fathers, and the Purchase of Freedom in Henry James's *The Portrait of a Lady*" *The Henry James Review* 26.2 (Spring 2005): 147-167. Pro-Quest. Web. 6 Jan. 2015.
- Toibin, Colm. "A Death, a Book, an Apartment: *The Portrait of a Lady*" *The Henry James Review* 30.3 (Fall 2009): 260-265. Pro-Quest. Web. 6 Jan. 2015.
- Yamaguchi, Yoshiko. "The Con Game in *The Portrait of a Lady*" *Yamanashi eiwa tanki daigaku kiyou* 26(December 1992): 137-164. CiNii. Web. 6 Jan. 2015.
- 生井 知子 「武者小路実篤 意識・言葉・理屈と無意識・身体・心」、同志社大学学術研究年報 第55巻 2004年、220頁 230頁、サイニー、(ウェブ、1月6日、2015年)。
- 舟阪 洋子 「絵画・演劇・小説 『ある婦人の肖像』から『鳩の翼』へ」、大阪外大英米研究、1979年、67頁 84頁、サイニー(ウェブ、1月6日、2015年)。
- 『広辞苑』、新村 出編、第5版、東京、岩波書店、1998年。